源氏目案 上

いろは

中野文庫

一

花島序云あづまぢにかたりつたへしうへにもれ
ぬを第の名の中まろがれたるがごとしこれまことに
水いろのごとくさらさらとながれてくもりなき
見るけどいよいよ光をます我國の玉寶と源氏物語
まさるべしこれまでせくのまてあそび
地とするわて花島の情をあらはし家々の注釋まち
まちまちて雪螢の功をつむといへどもいづれおとず
の河海抄いづれへ今ををむかへあらきあるをまつ
てもとかくも抄中のひれまろうして指南の道をえ
らんあれど第の海まもるどもてあらはれる
奠をもち討の材まもまづてくいぢにまもち兎にあへ

ア。のうれ氏ひろひあやまち氏あるべきもの先達の
もてしざるそむくべれば後生のうたがひなんぞ
ざるんやつわる愚眼のそうぶ筆舌ものべて鶴
餘情とゝ名づくるところなり
一宇治の大納言物語云今ハむかし越前寺為時といふ
世をのがれてくやうりけるに人ハむかしを記或アがおやや
この為時源氏ハけうりうるわこ歌うるかことをぞ
むもとめようせうりけるとぞ。さたいの文このとき氏
学ぶてむもとめ氏めいぶーうりけるに源氏ハたうを
うることうをぐまよりつうへうわざいりてのちつうを
うとるもアいれうまゝくるゝん

一順徳院御記兼久二年一切物語雖多或有復或記度也仮説物
語ハ詞指事ありけれと乞上ずめさ詞対勝也大和ハ無下
る為其外無何物語書も寛無其詮之為也源氏物語ハ
不可説物也更非俗人うく不為業或アハ書之始一條院有御
説不可説物也或アハ日本記をとゝうくうるれと
ら作于時左衛門侍姫ハ論言号日本記御為云誠
諸道諸藝皆縮ハ一篇不可説未曾有下説源氏哥ハ
方也狭衣哥ハ紙うれと云人ものと云ハ条心浮浅猿
事也更非同日論議狭衣哥もわく不思ハあれども源氏
哥ハ不可及事雲泥也元哥ハ道ハ知与不知水火者也源氏
ハ第一ハ詞つゝき非人ものと為不可説事也第二哥

逸是又何人及之乎三作悟也心虚云盡優羨過之事
もるべし但未見所又不可説也但是ハ我朝完上也
詞ハ更北人々一和為物也未知子細云々奉不可説是北九
古今後撰為大意時ハ則一条院ヒとゝ入り北九州
通物語

一河海序云光源氏ハ寛弘一条院のそゝぎに出て康和堀河院
のまゝにひろまりけり略云

一同物語云これもれゝうのおこり孫々わかくゝ人ども
西宮左大臣安和二年冬宰相中将左遷きれ給しゝば
若式部おもくるもくるもきれ給ひてゝひるげさけか
ゝ大政殿選子内親王村上女十宮上東門院へめづらるゝ事

やもべるとゝふゝれ部也給けるようつか作とり物
の古物語はめるれれば物語くゝくゝくゝいぶゝて
ゝまゝゝゝべゝゝゝ或部もおぼきれれば石山寺
る通夜してこのゝゝ紙いのゝ部おゝしも八月十
五夜の月湖水ようつゝ心のすゝゝゝゝまゝゝ物語玉風
情ようゝひけゝ紙ゝすれめゝ紀ゝゝて仏前ゝ
ありけゝ大般若の料紙を本ゝゝようけてゝまづ法華
あゝの女巻をゝゝゝゝゝ是ゝゝゝて次ゝの巻
ゝゝゝゝゝ

左大臣よりぞ〳〵へ紫上氏或アが身よりそへて周云
且白居易の古風ぬんぐゝへ左納云菅丞相のうゝを引
てうさ出しけるべし　その内源氏の書加てみす
ぼたよりてうてまつりし氏権大納云行成の清書
きさられて東院へまいらせられけるを法成寺入道
開白奥書を加られて云ゝ物語世間式アが作とのゝ
光北丘等を加るとゝるもせとゝ誠の君后の交仁義乃
為好色の媒菩提の縁のうまで是をのゝずゝ
うとる　其をもむさ荘子の寓言よりぞ出
詞の妖艶さゝる比類なし　アの中の紫上の事をも
られてうさでうるよ　為式アの名をあゝうて紫

式アと号きられ〻ゝ一説云為式アの名出云ゝ
ゝて後よ為のゝれのゝのゆゝよ紫の字よりゝめ
ゝとゝ云ゝ或説云一条院のれめれやてのゝもせ上東門院
へまいらせゝて我ゆゝのれるゝおゝれとも
ゝとアさせ給けるよりて為式アと号ゝ武蔵野也
ゝ

一物語の時代ハ醍醐朱雀村上三代よ准ずゝ桐壺門帝
延喜朱雀院ハ天慶冷泉院ハ天暦光源氏ハ西宮左大臣
なゝ

一照宣公の女ハ寛平法皇の皇女延喜の帝の内妹也後仕大
臣の女も桐壺内門の一内腹とゝ外甚偽ゝ雖者

ゑぶ前の准授誠よりせあらとゝへども此抽評光源氏
とむれとも源氏選の法ハ同家左大臣より准ずるゝ一世の
源氏左選の法ハ同しゝれども彼云好色の先達とハ
ゝてこゝろえざるゝや今の抽評ハ殊より道をむゝ
ゝ狭若曰法ゝもれどゝ大綱ハ其人乃
おもゝげあれども行法をきゝそもおるゝ他ゝゝく
まかれを損するゝ漢朝の書籍春秋史記か
ゝ実録ゝもゝく有ニ其風欲

一桐壺帝冷泉院を延喜天暦ゝ様ゝ或を
唐の玄宗のゝ或ハ秦始皇のゝ
ゝ例をゝゝ又天慶の門ハ相續の皇胤おりゝまき

れどゝ此ゝ光源氏ゝ今上冷泉院の
れ後ゝ武流曰此条有ニ作者意趣歟ゝ光源氏ゝ安和の左府ゝ
ゝへどゝ好色のゝハ道の先達ゝゝゝ生中将の
風をまねびて五條二条の后を落雲の女院勝月殿の
尚侍ゝゝ武ゝゝのゝか将のゝゝを
太上天皇の号も漢家ゝ
壁王子ホ先蹤を模ゝ歟是作物語の習也ゝ
いづれの時ゝゝて分明ゝ書ゝゝゝ
色去下ゝ延喜の御時ゝ云心をゝ
桓武一条院を桐壺門ゝ准じ又内大臣伊周公を光源
氏ゝ擬ゝゝゝゝ一ゝ
歟皆ゝ謬説也若桓武

といふべし。其いご後の帝王陽成宇多・延喜のれ名物語よ
わり一条院ちゝ延喜ら後ゝ代の事ゝしぞ。其
上次ぎ巻よ。ゝゝ上ゝ人すめ。千枝つねのとき。女
人米雀村上のれ世ゝ畫士ゝゝゝと云て一条院まで
生ず。又絵合の巻よ。雀院ゝ前代の由載ゝ無論事
一ゝ物語ゝ本一やうちゝ歟行成卿自筆の本も。惣今世
よ得ゝ次源光行ハ本をもて接合取捨して家本とせ
ア。所謂二条帥伊房本冷泉中納言朝隆本堀河右大臣後
房本号黄表紙右大臣説後一位藤子本土御門右大臣女号京極北政所法性寺関白本唐紙小双子号侍従本
ゝ条三位後成本京極中納言定家本号清表紙等也各雖違本皆
有異同。ゝ勘合古本。且可加ゝ見者耶。善者後之奉之義也

一黄表紙 後成ア 青表紙 定家二条家用ゝ奥入ゝ計ゝてゝ
ゝ達耶為也ゝ為相母阿仏尼為氏継母也奥入を切て流ゝ
也。或説奥入ハ伊行ゝ作也。それよ定家ゝ注を加ゝゝと云
一河内本。河内寺大監物源光行ハ本をゝて接合取捨して
家の本とする也
一紫式ア 母常陸介藤原為信女 上東門院女房。或鷹司殿女房

内舎人
勘修寺家祖
良門
閑院右大臣冬嗣公六男
高藤 勘修寺内大臣
兼輔
利基 右中将
兼忠 堤中納言
惟正 刑ア大輔 正五下越前守
為時
紫式ア

ゝゝ式アハ後ゝ左衛ゝ佐宣孝ゝ嫁して大弐三位弁局按云
者を生ず。ゝ田舎ハ匹親町ゝ南京極西頬今東小院向也。ゝ

院は上東門院の御墓也。又武ア墓所は雲林院・白毫院
南・小野皇墓の西なり

一源氏をうるよ心をゝでゝ一向感者必衰の心を寄てゝ見悪
き浮てハ好文のゝるよりばゝるよりつゝ名ゝ源氏をゞ始
をゝひてゝ見る

一凡そ十四帖の巻名ハ皆の意あり。一ハ月花をとり二ハ
七月をとり三ハ月と星とをとり四ハ月と星
を用ゐるもきらゝ代名とも天台の教ハ四諦法門を
一ハ月を門二ハ空門三ハ亦有亦空門四ハ非ハ非
空門也。一切の玄教ハ此四諦ハ出ぞ。これよりて故
諦外別立法性とも尺ゝ。真實の道理ハ玄教の

ゝ

一一巻桐壺　月を名とをゝ

桐壺ハ淋景舎也。此所曹司ゝるにゝて光源氏の母
御息所を桐壺更衣といふ。仍巻の名とせり。一名壺
前栽。月ゝれまへのつぐせんざいの盛ゝあり

二巻箒木　うゝを名とをゝ

はゝきぐの心をゝでゝその糸の道ゝ何やゝく頃ぞひゝかゝれ
并一空蟬　紙のゝるゝびを名とをゝ

中蟬のゝ代へてげゝまれ人ゝれゝかゝれ
巻の并のゝとハうつゝの抱ゝ身の并。春日祭。又
并ハ吹上巻。春日祭使　一ノ宮ノ勅使　勅宴　ゝるゝあり。濱松の中ぐゝ。并

一 はあり ぶおの例 狩 元 并の様 一 偏 と 同 時 の ごとく
もらしず 横 縦 そ 元 同 ぶ ぐ 元 分 る も 是 を 縦
并 と 云 空 蟬 の 巻 是 ち う つ か 漢 松 横 也 末 摘
も 縦 横 お 変 ち る
并 二 夕 顔 縦 の ち ら び 也 并 と 初 ら 元 名 ら ち る
心 あ て よ れ ら ぞ う 白 鶴 の 光 そ へ う ゆ ぶ か の そ れ
三 若 紫 舞 を 名 ら ち り 若 紫 と づ き 角 仮 初 い こ ぶ
あ つ て い 汚 し を ら ん 紫 の れ ま う ひ ら の べ の ま ら く さ
并 末 摘 花 横 縦 の ち ら び ち り 并 と 名 ら ち る
ち つ ら ら 付 ち る に ま る ま こ 元 末 摘 花 を 袖 ち れ る 角
四 紅 葉 賀 初 を 名 ら ち る

仮 び 巻 ま 紅 葉 賀 と づ き う か 初 い 元 ず 花 の く ん の 巻 ま
れ 紅 葉 賀 ら あ る 裏 な 紅 葉 の 巻 ま も ら し う る
五 花 宴 初 を 名 ら ち る
南 殿 の さ ら ら の そ ん を ち ま ら ら る
六 葵 う る を 名 ら ち る
ぶ う る や へ の ぐ ち る あ ひ ゆ へ 神 の ち る 元 ま と 行 け ら
七 榊 舞 を ら ら ぐ 元 名 ら ち る
神 ぐ ち 付 ち る れ 枝 も ち る 初 と い る ま ぐ へ 変 れ ち る ま で
八 花 散 里 う る を 名 ら ち る
元 ぐ ち 元 ち り う る 時 鳥 ち れ ち る 里 を 見 れ 二 ま ぐ ら ふ
九 須 磨 舞 を 初 を 名 ら ち る

松たるんすまれあまれ笹もいるるんすまれうんへ志ろ

十 明石 哥とうとうばを名らをる

ちげさつ明石の浦よ秋雪のうやさんをおもひやられ

十一 澪標 うゑ紙名らをる

うゑ紙てうるをるまうまでもめぐりあひろえうへみゝか

并一 蓬生 横のるゝびや哥と詞を名らをる

ゐれうゑも我そとゆめちるくゝきうまれまくの心を

并二 関屋 船のるゝびや詞を名らをる

関屋うるとばくうづれ野ううゑひずゝどもとわう

十二 澪合 詞を名らをる

し琴よ絵合とはゞきうう詞をるけまどゝうけうう乃

みうゑれまうつ日のうゝうげをあうせをまゝらあり秋

の詞わう浸拾遺集の詞よ西子内親王歌合の夏うう

十三 玄風 哥と詞を名らをる

月とうへて独人わう高よきゝゝはうう松うゞゞゝく

十四 薄雲 哥を名らをる

入日さす峯ようれびく薄雲いまれゞゝ袖ようやまゞへ

十五 槿 哥とうとうばを名らせう

うゝわう家わうとうれめ槿の花乃さうハすゞゝ和をあゝせ

十六 し女 哥と詞を名らせう

し女子も神さびゝゝて神袖ゝるうを世のゞとうひへあれば

十七 玉鬘 哥を名らをる

恋わたる身はそれなれど玉づさのたすきと野のこゑあらん

并一初音 縦のるゝびゝ也 哥と詞を名ゞきもの

手月を松よりひろひてゆゝ人よりふ鶯のこゑ〇こゑせゝ

并二胡蝶 縦のるゝびゝ也 哥と詞を名ゞきもの

菅そのゝこゑふとさえやもゝ草に緑まつ虫いうゝくこゑ〇

并三蛍 縦のるゝびゝ也 哥と詞を名ゞきもの

声はきで夕とのゝこゞす蛍こそいとゝまとゝさひあすゝあ

并四常夜 縦のるゝびゝ也 哥と詞を名ゞきもの

ゝでゝこゝろとゝもゝきゝゝをゝがゝとれゝを人や野〇ん

并五篝火 縦のるゝびゝ也 哥と詞を名ゞきもの

篝火よゝ地そゝふ恋のそゝゆゝこゝせゝたゝえゝあかの月ぬゝれ

并六野分 縦のるゝびゝ也 詞を名ゞきもの

野分例のゝゝゝゝもゝあゝ

并七御幸 縦のるゝびゝ也 哥を名ゞきもの

ゝゝゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝ

苔のうへぞのとうちゐどんでのくるとあり

二十ゐの葉上下哥と詞ゑ紙名をもつ。或ハ上巻をもつづくと云り

小松原まつをひこひれてやのべの夏れをうとつむ夏草

廿一 柏木 哥と詞を名をもつ

柏木を築もちの神いまをすべをかなるすべをかなのまゆ糸

廿二 横笛 哥を名をもつ

ふく笛のもとべいとをかうしあをもるしく吹ーねをつをせれ

哥 鈴虫 詞を名をもつ

大うらの秋をばうーとをもうすてをれすで虫の声

廿三 夕霧 哥を名をもつ

山里の義をそをもつ夕をさりうを立いぞんをもるをぬりして

廿四 御法 哥を名をもつ

ふをもべきれ法すべーぞをもるせをもむす中のりをもうハ

廿五 幻 哥を名をもつ

大空をとうを幻美をうをハをもの玉の明清ーーせをう

廿六 雲隠

ひ巻ハ名のーありて。をう詞いをーー白家の巻よひをうく

れ名ーー後をつをそをうをべを秋雲をうれハ逝去をのハをこ

と也。万葉神亀六年。左大臣長屋王賜死ス。後作哥

万三六六

太皇ーーー

廿三 三条院御時 治暦のころ 式部丞 ものがたり 式部丞 の名ぞ
わすれぬべきや 抑 巻の名ぞ 天台
の四教の法門と例 引 ものがたり 式部丞 巻 八九年のあひだ
島 ものがたり 式部丞 巻 八九年のあひだ

廿七 白宮 相 名 或 白芳つ 一名 薫中将
例の世人 白芳つ 薫中将 ものがたり
廿一 紅梅 紅梅 の ひとおもしろくあり
東の院 彩 紅梅 の ひとおもしろくあり

廿二 竹河 竹河 の 巻 名
竹河 巻 名 ものがたり
竹河 巻 名 ものがたり

廿八 橋姫 十帖 巻 名 ものがたり
橋姫 巻 名 ものがたり

ものがたり の心 ものがたり の 巻 袖 ぬれぬ
巻 名 ものがたり

廿九 椎本 巻 名 ものがたり
立 ものがたり 椎 本 巻 ものがたり

三十 角総 ものがたり 巻 名 ものがたり
わかな 巻 名 ものがたり

廿一 早蕨 ものがたり 巻 名 ものがたり
ものがたり 巻 名 ものがたり

廿二 寄木 巻 名 ものがたり 或一名 貝鳥
やどり木 巻 名 ものがたり

廿三 東屋 巻 名 ものがたり
ものがたり

廿四 浮舟 哥を名ごりとす

たちばなの小島いをもかいごとされうき舟でゝ漕ちれぬ

廿五 晴蛉 うゝどくゝだ紙名ごりとす

あちこちてゝ[illegible]れそれゆくゑもとまりし晴蛉

廿六 手習 こゝばを名ごりとす

てるゝひとつゝこゝば四ケ所あり

廿七 蜻蛉橋

花鳥ゝ云ひ哥の名い哥ゝ詞ゝをゝ[illegible]ゝ也

一ア名目ゝ空句ゝ料簡して手でゝ釈ゝをとゝめ

うゝ紀ゝゝい古哥の詞ゝ世中い蜻蛉のうゝ橋

ゝゝゝゝゝゝとゝゝ蜻蛉のうゝはけゝと仕ゝ[illegible]

そ[illegible]子細何海物ゝ[illegible]ゝ遠ゝ[illegible]ゝ[illegible]習

の哥の終のゝこゝばゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

源氏国語巻第一

い

一いづれのれ時より　は桐壺の御端の辞　甚深也　先作者とわ〳〵りさ
ぶ〳〵つ〳〵へうやう書うつ　巻〻は始終ともに越あり
傍人の雖　おりぐるおなじ　姫君のれ門のれ時の夏也　仲勢集
の始　ともいづれのれ時　ようるんば　詞をとれと

一いと　寛也　一いとへのへのうあうて

桐壺の更衣の女うへをかめ　心也　うあ　撮也

一いたう〳〵　早晩也　い　助語　一いさめ　諫也　禁制の心

一いつく　つゝき心也　一いと〳〵　つよくの心也

一いとゞく　はなはだ　況也　又　感也　ものうとも心うべし

一いつへ　答也　いつへ　いつくも　一いつかなまへ　ば

花鳥　おもうるまつ　也　一いぶせき　心也　いぶせう

也　おもふ　心也　一いたうけるに　幼稚也

一いたう　聊也　一いとゞ　弥也　ますく　助語也

雲の上人　男女也　昇殿の人をいふ

一いらと　かつ　寛也　一いまさら　今将也

一いせ　ゆき　ようもをめ　人　是之呼　味勘

仲勢集

一みてそまる　拳将也

一みてそまる　居立也

一ものうて　池之の祥也

一いらけるに　いらけるに　倚也

一いらけるに　いらけるに　憚度也　いとさるさとつべし

為家つ説・和もくゆひ・ち・か冠人のゆふ・ようてや・ちふ心と
く・家服のれ女を・源氏よれそひ・ぐ・ようれ心や

一いさゆひ 勢や　一六日いつむいうどうむべ〜

一いとうる 理覚　一池の心ひろく 池底や

一いひくうれゆふ やうるる名ふ　一ちちの紙ある文 青いろ鬼る

いひろるるひや　一いうるる 優ちるや

数書をうさ〜じや

一いまけるるれるるうう・三男唯一心百法唯識の心や

一いひそ〜けらくいふ心や 言穀いひうるるゆぐ〜云心や

一いひ〜ろひ 乗るいひうる物や引ちうふるぐいへるうう

一いへぢとおゆけんる 馬ひが前ふ女を遠ざうて後い定うる妻ちるるや

一いまめれうる物の声 管絃もそううつへうるいゆひ

らううず・今指るめぐ〜うるるいでうるや

一いうや ふ寄ちるる

一いうれゆ 伊与寺をゆといへる

度長宜も次官も職掌ハおるぐきおや 諸国寺関乃時も

ゆ長官の度を執行や・おるゆりて・寺をゆらも云へう

一いもうど 系番るけおれるてもれ女をい男の求るるく法や・

古今の序るずうれをの昔るを・天照れ神のうれうをいへう

一いぐるるるるけう 人のれごいうる云や

一いぐ〜 俗るうりやと云心　一いむ 忌やうふうとや

一いでけうびいまけるるる うつるこのまけゆべ〜

一いうれゆげるも 伊与ゆ住るある時ちる面白書ちるるう

一いとまうくいとまうくや

一いさいづくへとさそふや

いさよひと云も夕の山の端よりやとりて野ねやに入るもやすらふや

一いつくへも いつくへまゐるまどさらん落葉哉

一いぬるまれ いねられどやいねられぬや

一つへくく 鴿 本草云 頸短 便絶

一いくくく 心にくき心也

ちちち

一いぬき 犬云 昔い女子をあてざどくざこもきるどいへり

一いぬる十日 去る十日也

一いけるき くづの一声ハ紫乃

ふもとをきくのつくおくまるづむい源氏の我身をさして

のくまふるち泥えるくめいぬどるくめくるちる

一いむくとれまうる 受戒きくくや

一いさらふ月やとくくふや十六夜也

一いつくへまゐるまどさらん落葉哉

一いぬるまれ いねられどやいねられぬや

一いくくく 心にくき心也

一いぬる十日 去る十日也

一いけるき くづの一声ハ紫乃

一いくくく 心にくき心也

一いくくく ちちふ心也 卒

一いるび いやとふ心也

多暦

一いまやういろのえゆうすまくくく 花 今業 今やうちとハ紅梅のこ

ちくくく

一つうそく　有職也　又右族也　一一院　寛平法皇ゟ五代ゝ
一いうそく　俗ゟ　ぶせゝ　子孫ゝへゝ　令婦が如へしも同
一いうぐさ道ちゝうゝ　後の世のたのゝとゝ
一いづれそと　ぶぢゝぐ　ゟ　ぶもそ　ゝけうけ　家のやぐうとも
めうしゝうべきいうれうゝ
一いたれいつさうづゝ也　一一条堀ち一条と西へ切也
一いさすぶ　生霊也　又ゝ　霊のゝゝ
一いちゝやさ　早速すゝやうゝ　ぶゝうゝ
一みんゝうゝ　掩韻　古詩の字と　ゝ　下句の赤字を何
文字ど　推　して　時　員　ゝ　ゝ
一院のゝ　何　ゝ　家花物語ゝ　岩伝と云　ゝ　廟の

変ゝ　松浦のゝ　孩天暦陵と心ゝて言ゝ
一いたゝ　春のゝやこ　ゝ　ゝすゝ
一いろゝのゝてゝ　青幣　白幣　日本記　又五色幣ゝ
一家とゝゝれ　雛家　三四月　落涙　百千行
一いつのにぐゝ　又渭也　一石山　聖武天皇ゝ　金鶏　仙
人建立ゝと
一いろゝけゝとけつきゝ
めひ地ゝゝぞめ　持　禊ゝめ　ひ地ゝゝ　深ゝ
一いゝめて　ゝゝゝゝめゝ
一いゝゝゝ　張騫　漢武帝使ゝて　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝて　孟律　ゝ　ゝて　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
一いゝゝ　小井　暴記　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

一一世の源氏　源氏と初てのり氏、二世の源氏と云也、三世源氏任官已後、即位例　光仁天皇、元大納云　此外多略ス

一いまひとつの結さ〜つ　なつぐのこゝも一説結ぶ心とゝけ結也

一いとゝをゝ　いとゝをゝ海そ奥と元奥也　我身れさとゝ云

ひさゝゝこも、粥舟のゝぐ、海と海のいとゝぐまぐ人所ゝ

一家うゝかゝまゝうゝ　倩表也

一いとゝへを　礼楽とゝくゝうゝ　尚代を続のゝ

一いとゝぐゝ　一物也

一いとゝぐゝ　一物也

一いとゝも　墨の光とゝゝ結　殺人　如鑒春臺　註遮和也

一いまあ紙ゝすゝぐ　未濃ゝ代事　上白く

すゝと紫、或い紺ゝ深ゝ也

結ゝ　ゝ行ゝ女の事

ゝゝ人と云歌

般若沙法の心ゝ行合ゝて　碎空碎破の空理ゝ方等

ゝゝも空清光ゝ　今畢竟皆空と説て　枝木の様とゆり

ゝゝへて、ゝ空丁念のゝゝと与へのゝ是とゝひゝそゆけハひと

ゝゝもれと云へれれ、又般若ゝゝゝず、方法一如の心れと云

一つゝゝ　鰓

ゝゝゝて、家づくへのゝ氏ゝいれ者人をハ古ゝゝ宮ゝゝゝと也

一いゝゝゝいゝゝゝの心也　一いゝも山　清あ稿、奥列也文也

ゝゝまゝゝ行のゝん也　一いゝゝゝ　三位ゝゝ紫の衣と風

一一世の源氏　源氏と初てのり氏、二世の源氏と云也、三世源氏任官已後、即位例　光仁天皇、元大納云　此外多略ス

一いまひとつの結さ〜つ　なつぐのこゝも一説結ぶ心とゝけ結也

一いとゝをゝ　いとゝをゝ海そ奥と元奥也　我身れさとゝ云

ひさゝゝこも、粥舟のゝぐ、海と海のいとゝぐまぐ人所ゝ

一家うゝかゝまゝうゝ　倩表也

一いとゝへを　礼楽とゝくゝうゝ　尚代を続のゝ

一いとゝぐゝ　一物也

一いとゝぐゝ　一物也

一いとゝも　墨の光とゝゝ結　殺人　如鑒春臺　註遮和也

一いまあ紙ゝすゝぐ　未濃ゝ代事　上白く

すゝと紫、或い紺ゝ深ゝ也

結ゝ　ゝ行ゝ女の事

ゝゝ人と云歌

般若沙法の心ゝ行合ゝて　碎空碎破の空理ゝ方等

ゝゝも空清光ゝ　今畢竟皆空と説て　枝木の様とゆり

ゝゝへて、ゝ空丁念のゝゝと与へのゝ是とゝひゝそゆけハひと

ゝゝもれと云へれれ、又般若ゝゝゝず、方法一如の心れと云

一つゝゝ　鰓

ゝゝゝて、家づくへのゝ氏ゝいれ者人をハ古ゝゝ宮ゝゝゝと也

一いゝゝゝいゝゝゝの心也　一いゝも山　清あ稿、奥列也文也

ゝゝまゝゝ行のゝん也　一いゝゝゝ　三位ゝゝ紫の衣と風

ゆへよ加階のこと紙ちう　一いやくちく　殺心なり
苔のうらめ　れ　うはけらいてきへれと云心也
一家ぞくのぞむ　女三の家司と云と帝王女選ばれ人事也
一ちきまき　こと氣巻　息巻　の紙いづ　いうか　思也
一ちうへのちう　源氏の天皇世紙治治ちうこ　恋仕云をちうひ
ちうれみとあつけ結事と云と　それこ女三宮と准ずれ義也
一いのちうて　命ハうもちうも世のちうれ　結ちうれば結ちうもまづ也
一いうれば　鶯と源氏こうたて　猫と女三こうたる也　鶯こ弟の物也
一いだ　ちうれうへ　猫うて女三とちうひ　猫とうて云也
一ちうふ　女ちうちう也　一つ柏木　ちうたとちうひいうれ紙ちうちうれも
のちうんちうも　一いづれとう　ちうこうる海ちうぶ海

ちうちう家のちうち成べ　海ねうれもちうれもちうれとも也
一いたちうは　女三の小野ちうて今いくいうちう紙義れ世をかもちうひ
ちうちうおちうぶちうの結ひしとちうて　ちうれちうちうのへう　明ぬ義の
義ちは世の義ううべし　一いそれちう　古き　れとちうの也
一池の蓮　時移変去　樂尽悲来　毎至春ちう日冬ちう夜　池蓮
夏用　宮槐秋落　長恨哥伝　一いたちうのちうぶ　女人卑　狐
ちう五障　一者　不得成梵天王　二者帝釈　三者魔王　四者転輪聖
王　五者仏身　竹川　一いちうゆう　いちうち所謂
一いちうちうちうおりうちう心也　一ちう日ちう人ちう　還城楽陵王と
あやあんちう日の書れちう　撥して日ちう午ちうめちうぬすと云ちう
史記云曽陽八弦廻落日　一いちうぶ　宮ちう抑也　馬ちうぶ　立心

一いろうの浅茅　あさぢの物也

一ちとうけう　大志の服衣也　一いげくとう　ちゝへの弁に書へぐて

ぞとまるあるうて　家こうえうれ服者の家をうること

一いもの　ごもいれの字也　一いげ　そやもいろぐやるれぐ　その

字清　字べし　本よりとまるせうること

一いもせの海のうちこ鳥めいろう　人げてとあると　人づてるぐで

と云心る打入てうるうる　薫の中恋よ一夜逢ぬひ〜とこの船うること

一いるげるる日とるるか　鎖日不少暮

一いるづ恋る　苔もとくわひつれとも　無実変也　大志もめびきこ〜とこと

一いげこば　今の本陣川也　ぐこ行ともうる　崇神　天皇　挑戦の歌也

一いるちれゆん　魅ハ地とうるぐう物也　心やるく牧うるぐ　心まと

あるとつへうのうげとは心もとるうにびりるく思ふとうること

一いぐるうめ　伊賀刀女也　中媒也　うるめうは　狐をいふなり

一いさうけ　夜ごいとこ云心也　一いげくうう　白雲のくるゐ山うは

ゆうられうること也

一いるうもれ伊ぐぐと　真実の機はあるずうて使うびすれ

一いりるうる　いりくるうるぐ　世俗ようる詞也　けさ心ぞうるすうや

一いりへの扇　め室　うすやううてゆ室うること　冬の扇也

一いちの不也　摂政関白不也

ろ

一ろくの物　禄物也

一ろくのうるひつ　禄章櫃

一ろくの条ワうう　れ息所の夏姿て出をう　古前坊の小方也　新好乃

中宮のれ母也

釋紙十巻　文句十巻　疏記十巻　一六十巻とゝ物し　玄義十巻

摩訶止観十巻　弘決十巻

一六位の中にも殿人はあれども　六位殿人は麹塵の袍と着もの

と青色とゝ今も極臈の殿人は着もの也

一六位すくも　六位冠者とゝ云ふすくもはまの結りとゝ

一六条院にもゝ　河原院を模すもの

一ゝ物語　多論也　一六条院ゝ　花鳥歌　此の別

業也　陽成院ゝ　おりまゝ　ゝ治院と号も陽成

院の出後宇多の門仏知ましく　茅萱院れ門も結ゝ

給ふ　ゝ後六条左大臣雅信公の仏ゝ　長徳比れ堂

関白　賀海ゝ給ふ　ゝ物語ゝ六条院ゝ

一六条院ゝ　白家の内ゝも曹司ゝ　又六条院

の内ゝも曹司ゝ也　又六条院

一六十位のゝを　大般若轉讀の

ゝ七位を六中位の中ゝ

一ゝ　喇叭　ゝ

は

一すゝ紀　多半　恒常　多くこゝゝ心ゝべき也　二位前

一はゝ　聲華　一坊ゝも　長宮坊　職員令御門

ゝを給べきれ也

一はゝ　ゝ　ゝ心　鬼鬼　日本記

一はゝ紀の夏　皇子三歳ゝて　袴着の例　冷泉院　天暦四年

七月廿二日　東宮の時ゝ外例　多ゝ女人のゝ月

一けうるき　妄乱　妄墓いようひるきうろるべー
一けるさむき　将寒　肌とにうてうむ　流もも　膚の寒せ
一けぐさうういく　養心　一けぐもるれ門と東家とれ
ちちいへらもぐむい養育の心せ
一けのとるべ　校とけうん　在天願作　比翼鳥　在地願作連理枝　長恨哥
一けいぜん　陪膳せ　四位参上人
一けぐ志ちてぐて　ひぐにの
のすか役といへち
竹聊むつ　妙志のかつ　海志ちて時ハ皆人それこれ　あ妙志乃
ケてぐにようこと給べきさ今いこぐこ結事あぐどさ云心必べー
一けうせ　博士　一けいーなるみ　親主ハ下元
服の拝舞ハ清涼殿の東の庭ようそれ前へ仙家紙　あち

一けーアぐき　草筆のくちにいち
一けぶうぞ　不肖　一けやうもくのちにやう
とへち　肖の事せ　一けげこ　勵　念魚心せ
一ぜんちきぐう　盤渉調ハ冬の調ちれハちるあひそうぬべー
一けうちくちる　傍側ハちるハちる心せ　飽足　一後　飽
一芸ちるあのめ　変ちれハいへるせ
一けうく　股ぐいくちくといふち
一けぐどちん　ゆ鄭　常のちちくハ皆ちるとと是いちるくぐう
ちなる次やうもちるせ　花鳥　下ハかうーくる　枝ちぐせうち
て上ちちくくをつてかへあぐるやうにちうせつ　車ちもも
ドちくちてちうへのちくぐちあぐるせ　ゆ鄭と名付しるせ

一はつかの兄弟也同腹
大井の為兼明親王とも申伝ハ皮れ女よ唯じて心うべし
一はつ菊ハ紫とも菊とも書くるハ心ハ同也
一はるちぐさ　教書文字ひらがなにて也いろくさ
ちさけどもあを云也
るゐえそこるはぐとの心也
一はげーてんをうづもそて
一はぐろめも　花鳥　山海経云
東海有黒歯國其俗婦人歯悉黒染今案日本ハ東海乃
中ハ國也皮俗ハるるるるるや昔ハいとさるる女ハだんちく
えをはざれば古代のおぐだのるるつて紫の姫ハ十歳
まあまるまで歯黒めをるるるるるる
一はるがる　仁和荷河の行幸次幸ハ八条院ハ海邸寄ハ

興ハるる俗物造階俗をるる見ハ更ア王記天慶六ハ寄也今案南
階のるる柱を二ハるる上をあるいぶるをもるるぐく
るるく云鳳輦をひんぐーむるるるるるるるるるるるるる
案れ下れあるんるる也
一芸のるるれる山茶花鳥うる
ゆの弟九云芸のるるれるるるるるるるるるるるる

事あり。碁盤・山菅・山櫁・海松・青貝の石二・美之也・果おをの
繋よりそこ也 一けつる也 繋・繋ごいつる
せそ。人よりあ人とそ。ゆ。神のそ。とへ。のまつりのそ
ア。るぶ。紙ゆ。そ。ゆ。されどひそ。そなる
一芸やそ。ゆ。そ。也。先ゆ。そ。んぎ。れどそんひ。ゆ。ゆ。冊あれどネ
所。院の心。との。也。共芸れ。ぢめよ。そ。まゆ。もんの心。そ。ゆ。也
一八省。ゆ。そ。て。ぢけ。ゆ。 孝徳天皇大化四年二月始置八省
大極殿とび八省とゆ。ゆ。ぶ。八省とも。ゆ。ゆ。八省の本院ゆ。ゆ。
也。朱雀門の内一町よあゆ。南限冷泉院北限沖の門。東い東乃
坊城西の坊城を限也。出車ハ八省の糸ゆよ立ぢけ。ゆ。べし。
いぶ。車ハ人給の夏也 一白虹日をつゆ。そ。ゆ。ぶ。ゆ。

荊漢書曰。昔荊軻。慕燕丹之儀。白虹貫日。太子畏之 燕乃
太子丹。始皇をゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。今源氏をそ。へ。ゆ。也
況本より日ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
をつ。ゆけどそ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
を。荊軻をそれ。ゆ。也。今源氏を荊軻。ゆ。ゆ。ゆ。冷泉院を
太子丹。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。 一芸秋のれ。ゆ。ゆ。 春秋御
讀綾。同云。源氏のそ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
源氏のそ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ

也縹唐紙

ひやうしと云うるあるを

紫明ゟ蜂吹拂心也是ハ沈てゆて濃

一毋うるうるうるうて　朱雀院ハ延喜第十一村上天皇ハ第十四皇子

まて此女皇れ母中宮温子昭宣公の女也兼明第一親王ゟれば

更衣腹故人臣也此例れ

一はうるうるおやゟ　手愚親ゟ賢

ゟのまうるうる也況愚ゟ手

一はうるうるうき　鼻の動りや

うくや目の動とめうるうるうる

一芳のうち　ちらし枝とハ早下
の心也　うつん袖ハ姫　志のうつれ燒物なれバ袖ハわきくハ
一芸のくむけのめさ袋　すきさう袋也　三月の素なれバ芸志
初夏初也　めさ袋　旅もの人ハ袋ハ入て送物也
一けつつりまが　祝ゆ　ものびらうハ神の納受のうちう
さしつ心なること　一芸秋の行幸　紀親行幸を云
一芸のうくのハ芸の御ハ　たいど変なれバ　ぐれうつ　にぐれん
さ　源氏のつく物　くゑ　也　一けうくうれ　股黒　也
一芸のうとうくのへて　蓮　沢也　一うちす　葉　武　事也　おるで
蓮芸と　ぐれ　ごとぐ　今日の別　ぐ　也　女三の法事ハ身
とうくうて　法事　ハ　ぐ　會　僧　心也　弄花家

一芳のうち　ちらし枝とハ早下
の心也　うつん袖ハ姫　志のうつれ燒物なれバ袖ハわきくハ
一芸のくむけのめさ袋　すきさう袋也　三月の素なれバ芸志
初夏初也　めさ袋　旅もの人ハ袋ハ入て送物也
一けつつりまが　祝ゆ　ものびらうハ神の納受のうちう
さしつ心なること　一芸秋の行幸　紀親行幸を云
一芸のうくのハ芸の御ハ　たいど変なれバ　ぐれうつ　にぐれん
さ　源氏のつく物　くゑ　也　一けうくうれ　股黒　也
一芸のうとうくのへて　蓮　沢也　一うちす　葉　武　事也　おるで
蓮芸と　ぐれ　ごとぐ　今日の別　ぐ　也　女三の法事ハ身
とうくうて　法事　ハ　ぐ　會　僧　心也　弄花家

一羽衣の　羽　衣ハ　ぐ　ハ　ぐ　ハ　ぐ　

一毋ぶらや　注舟の毋ハ早下する人也　殺刑の時ハ早下する也　玄
[illegible]文[illegible]也
[illegible]　班犀節・宝位　位の人常ハ用之　云つ眼者也　犀
節　孫爾[illegible]　班犀[illegible]
一芝とりへも　女郎花の名ハ[illegible]
ぬそを也　実[illegible]
も[illegible]盃の名也　蓮[illegible]の也　青磁盃也
一葉のうすきこと　陵園妾云　新文ぬ花　令ハ葉落　白氏文集
ハ詩ハ君恩のうすきこと　云　今拾遺ハ命の夏よりの
に
一にけるず　無[illegible]也　[illegible]
[illegible]けるこそ[illegible]ハ[illegible]也

[illegible]也　[illegible]ハ[illegible]
一二のまち　次の町　云心也
云也　饒舌
一にうさけ[illegible]　富貴[illegible]
一にうよ[illegible]　俗人[illegible]也
一にうてハ[illegible]　変[illegible]
にしのくい　西[illegible]也
一にびゑ　祝毋の服装也　三ケ月の服也　[illegible]
一にぬりて[illegible]　[illegible]の黒[illegible]
一仁王會　七[illegible]　即[illegible]
一[illegible]
一にびゑの　服者の[illegible]
いろのうれを云也
すくちさ也
よ[illegible]
いろ

のへらもうまびなの印を用黒儿悦ら尺まつの紙ふ
まつてまうくふらてんせ惟ハ是もまびいろまと
一にゆくく入学せ　一に伊島より鳴島ハ拓詞せうげを
ゐくゐ島せ若ごもとあやめとうけさるくゐせ宗敬と源氏
さ引ゐくまびとくくゐれせ伊つまハ若ごもせまとこと必ゐ色せ
一日本記　次巻始神代至持統天皇御世
一西山ゐゐれる　仁和寺と云せ光孝天皇れ新ゐくゐ
仁和寺中よれくゐれゐ仁和寺ご号ゐ又義平れ門
ハ天暦六辛三月れ出家ゐて四月より仁和寺より選れあると式物
語の朱雀院ハ彰平れ門より惟じてれこれを合書儿せ
一にくのくゐ十方　後是西方過十万億仏土有世界名為極

糸卜　竹弥陀經

ゐくさあるよ自ひゐるすと云せ
ゐび深の袖ハ表上ゐ人の下製の袖ゐ
一に川ゐくゐれ身よくゐて　れされの声と儿息耳のく治よれ
さてよあるれ身と笛とさてのゐふくゐると
一にゆくさ　純ゐくゐる心　一にゆくさこれくゐやハ伊ゐるべき
幼
梅仙窟　容顔　似翼　潘安仕之外　甥　気調　如兄崔季珪之ホ
妹　気調のいさざくハ兄のくくと云何ゐていくくゐ自分
の笑とゐくくゐ女一分より似ゐくる自分の兄ゐていくせ絶せこの人
と云心せ　手一ホ分ハ女二分のれゐれることせうゐもゐくひくくせ
ゐてくゐ絶くゐるれ似ゐくる心ゐるべ

ほ

一ほい　本意也

一ほうげ　火氣也

ほさ　女房ならへて云也

一ほゆがて　そくそくとうめも　方曲也

一ほうけづき　仏法うさ也

一ほこ　かるふ神也

一ほうらいの山　是ちうそ地獄と

一ほのこも　ほれうなちし

一ほのめす　まい者ほうは　我心がまい添へてひらぐる心也

一佛のれもくべいくさに入事も　従冥入於冥永不聞佛名

一佛いとのけうして　上の句ほうけのれもくべとる家し我

ちうけいはうまのもち治ちんられうちうる

一法花三昧とこうまぐれもんぼれ声山おろしにうけてそて

止観ほ宝積三昧あるいしゆり常行常座まま行まま座非行非

座四種也法花懺法ハまま行まま座の三昧也懺法し天台大所

或流年式ハそうぶ百六時ほ六根の罪を懺悔すう法文也

六条有房ハ云懺法の曲ほ山風のおろしづ瀧のけうし

ずとうふ口偽のうをそひうそへて書うう音ゝく女房ごと

ちうぶうけうほ今ハ式石月ちぐうまうう偽もうまうやこと

一ほんうも　本ほも也

一ほそうちう　保曽呂倶也

利　禾の名也

一ほうしく　胎ど云心也

一ほうそん　尊　高也

一法衆三昧　普賢大士　南無法華

衆三昧普賢今相ど云ゝ大士ど同変也法衆衆生普賢ど同體

と云義也

一ほけれて　みれる心也
　惜れけり何也

一ほうげる　ほうける心
　仁徳天皇の代時始て
一ほうけ江
一ほんさいのるぐ　弄　世を改
　れ度と願ふと云へ給也
一法しいひろめと　寛筆供
　奉の度元文何度うても出家ともよこ面の姫わらひこも也
一ほうれ里ゝいまゝゝかつめるや　花
　ちりうわ心也
一ほうれとうすきるゝ花うつ
　ほの名ぐるまも蛍とつむ度る何方ゝいうする肩ちなど
　もむ只ひぐるぐのろのうすさ有ようもとるる也
一郭公ちるぐ　四月交雲外語　三三更後雨中声
一佛のいとうかりゝる心うて　九月末出世の本さい元聖一如若更

不二の理と説て衆生のまうひを速ゝ懺さんと学ゝめて大悲
心ふかゝゝさ心也　かゝ玉も実報花王ゝて花厳経説給時八
ゝも法華ようかりゝる心　やうらくるぐとりぐるて元生ゝを
ゝゝ仏も報身の姿ゝて修行の報ゝて是又うかりゝさ形ゝ
て説ゝ三界唯一心の法ゝられば仏の心もうかりゝさゝる
一ぼゝいとぼんゝる　佛の内御あゝゝられてゝられば則菩提則
煩悩也　絶一実相ゝて更ゝ別の法ゝ
一のほそびいゝくゝ　消擦也　一ほぐゝく皮　驚ゝ義也
一ほんゝすべき　玉と女の本ゝ定治ごゝゝ
一ほのゝゝ　みれゝる心也　一ほれとかゝ　朗ゝゝれ心
一ほそゝるが　未西女のゝゝるぐゝる也ゝゝゝその他也　若后逆

女れ・なとちるしらるも莫用也　組まて細を付ちら

一佛のうでーの　仏經は滅亡志のへぐも・常住此不滅也と説

給也・不滅をちらちるぐ・貪み遊欲しぐらくと・危乙の心を云也

一ぼんしーのいふ　梵字也　一仏のおるぐちやうぶい花れ

帳臺のうへは・仏どおるぐくく経の机とれらるべー

一仏のおりまちる百觀經云・阿弥陀仏・去此不遠・極楽莊厳ちも

やらくくらる也　一仏ともちめ人　巻の紙事を

のの一つ也　一ほるいでめ　中志のほる出ぐ

もて・下に地ちひのるとちんぐての井也・志のずきいほる出め

地るれいを一ふ為ど云一義也　一ほらるぐく　その色也

一ほらけい　經云　實説者不誑説者云

一ほうしうし　法性寺　貞信乙建立しーの一也

一仏のきえそふ　仏のいまし・えとなる

一ほるく者　ほるめるる所心・名香の蜜をすくるく入て・ほる也

一ほづえ　末也　一ほく　反台也　ほんぐくもむぐし

へ

一べちるう　別納也・前に立ちる所也・曹司人の住也

一へんぐえ　變化也　一へいちう　花　平定文があざ名也

ふる・平仲・宇治大納云物語云・平仲が女のもとへゆきて・ふ

くちるれとして・祝の水入をとるとしるもちて・月をやし

けるとて四ちて・云をとるとしるもちて入ちるとしらて・ちるやし

れいが女・撓をとるとして・ちるとしらて・ちるやし

我ものそけ〳〵とけ志ぐらすれせ人なすきつくられそ〳〵
人なすこつくいうそにうやすこけんられこと也
一へんけき　文字れへんとつさていうろ学こうろ〳〵云事ケ
一へいどるぐこうる　親子ちやく〳〵也
一へんげの相とおぼしること　河海　四生の中れ化生と云べき
うど紙されられど人界ハ初初の時こそ化生ちどいあと
こられ今の変化ど云ハ仏業薩の孔力或ハ定力ようと
方善悪の業と感じて　うよそ形を現ず事あわ変
易生死らけられと云也　布袋和尚ハ弥勒の変化寒山拾
得ハ文殊普賢ど云ぐ〳〵　花鳥上下略〳〵
一へいきう　笑岐八幡社系の時四位四人位四人ぶ上十二人を

めて真して於神前東接ぜうこそせこう也それを陪
浪らけ云也手ぶの陪浪ハ近侍ぐられ人ぶ也
一へぶそる〳〵　女三の我ハへぶてる〳〵疑ちても法氏の心ケきう
うまぐさられ心也
ちれどらけいうどなる
ど
一とうかう　時〳〵いうを付うてよく成べ〳〵生人老く
ちめ紀治
芸ゆくを心月　一
一とうよえもれをの結うう浪　一とのね　宿主
一ぐくさ　ちやくられ心也　牧の字也
一うをしびどうけ　長恨哥　一とげうを　何そもをどぐる心
孤燈挑盡未成眠

一らんちゅう　屯食　ちくさいねや　今は島のおこ用し

一とうろう紀　あをばさや

一ごまうまとも　本妻ごとや

一こぢうちゑばーの心や

一ごぢう　共や　友ごぢう　女ごぢう　皆友の事や　百風共とあり

一らうアさん　元出ーアさんの心

一ごぢう帳も　賽馬　乘弁　詞や　ごぢうハ愧やちやうハ怯や

一ちうもるて　安動や

一うきゑ　一さうでの　元出結や

一戸まるちたるもたけハ妻ア　れけれや

一ごさ海へく　外ごうまるへ心や　ごぢうちゑるべし

一ちけごうちし　れ息あれ　始ハつれちゑーと　さ海ぐいひか

びー結て　又ひさくへーとづれざうんいとり　きさちゑと

一ワひーさ紀

一ごうまるざーいさをめて　とうちゑごもどうめやうす

ちひいれど　まざーすする拍や　一どうやうのこゑ　演説聲　僧侶

ちるべー　引声れ　あるぐ　強欲

一らに　外や

一ら紀あるて　一ちび紀ーくハ

優曇華の夏　人壽八万歳の時節　金輪王　遠四劫　其時海

水半減　ずるようて　ぶ出現　するなり

一らこうてまつる　獨鈷

一といめといふうす　夫婦の

中ま　ハいめべさてもあーずとやめけちるぐのいふとどさ紀心

一どまるる　どまるる　ハ源　清　ハ菩心　とうんと　ハ息あの

ちけようちめひーれをハのえうー結や

一とうおんのち　西洞院　とも　東洞院　とも　いめべー

一とうくい　花　登花　花ハ弘　微　の　ちまるる　梅壺　ハ　文　壺

花咲のうつくしきあいだれもうれしうきあいだ
ひとり月人もすまず塵よむもれうるうち
一このゐ人ふうふとうたげうるうち花鳥夜行すを清よ人
乃さへ宮おれ腐の前うてこいだうれといへるゆべしと云
一うつくしひとけどり　花鳥　小山羽猟物云宿神宮子時　左陣　角
刻夜行　巳寅刻　八右陣　勒　巳刻　物節　下人中　宿神姫
肉　略
一　友ちとる　我ひとりとちへいよ鳥友をつれてひとれ心せ　この
しうたは源氏文　新の人ふとちるふ事もやあうんとせ
一とうひ　新人也
一うつくげいきけしきは風よ弄十三歳の時遣唐使りて
波斯國より到る　胡琴壺　孝行の者也　阿陵羅琴を造りて
うへ一度あり　花うつくの拍沢　うつくげうきまれて　おろ
うへ　ろうきうよ　悪風　あひて　波斯　行又　梅檀　琴
そうておそぶ処よ　琴　今とうしい極　霜雪　ふ
天地とうごす　日ひよ　人　うて　名　あげうる也
一うれう　化の節会　年中の節會也
一うれうれど　この笑　子　親　違う也
一年うきうて　家のれうて　落雲　係　間の夏三月　也
一百うの大きやう　大政大臣　内大臣　新任饗の事　次
一うゆのまれう　箏取　南也　ゆの者也　左のまうて　絃
も事ありべし
一ううう　年忌　一流ううた

十まとつるを云也 月半満也

一玉くし半月へぐるめれば おうぐるを

しタぐかれ 此詞束摘巻 よ月 玉うぐ 変をかん 落よ 先タ

ばの事をかるわ

一哥 うをへて 哥の心面いぐ海う

つの変を 為ていぐされ さいをいよどわんで けるよ 坂監よ

られわば 神をつ ど ごんどや 監うごんを も忘て

まれば 打心けうまよど 詞ると書て 等らと為ての哥を

紙逸哥をて 為すと 監ういうや むをめぐを 名理をあめやう

こ云ぐうする也

一哥 月を 拾遺集よめ式の類

あわ 門哥 れよる

調 系也 島の系よ感 ど て 為よ 鳴 鶯 を 池の水 鳥も 鳴 ぐる ど也

一ぐ ねわ ぐ ぐ へ 花 ど ねわ ぐ は 近 清 を 云 ぐ る

一極えて ぐ ぐ て ぐ ぐ ぐ は 奥 也 昔 よ ぐ ぐ ぐ は 心 也 ど ぐ わ は 外

也 ず 忘 よ ぐ ぐ て 也

一 ぐ ま ぐ 入 て ぐ ぐ け ぐ る

ぐる

一 芸 家 の 宣 旨 ぐる 内 侍 の ぐ け

女 の 宮 也 宣 旨 ど 内 侍 ど 兼 宮 ど ぐ ぐ る 人 也 れ 湯 よ ま い ぐ る 人 る

べ

一 年 ぐ と れ 芸 秋 の 神 系 る

明 石 入 道 の 孔 よ 毎 年 ぐ し 神 系 毎 度 又 ぐ 神 よ 孔 と く 以 人

毎 ど み し ぐ る

一 ぐ す る ぐ と ぐ ど 替 古 す ぐ こ

ぐ ど の 変 也

一時 ぐ る 雲 霧 と ぐ 者 河 海 ぐ ぐ

ぐの の 一 ぐ げ 琴 と れ ぐ ま ぐ る よ ぐ ど の ぐ ん へ の ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ て

ぐの ど く ま ぐ る 今 一 れ ぐ る よ 六 月 中 十 日 れ 孤 よ 雲 ま を

ま れ ど く ぐ ま ぐ て ま ぐ る れ 門 ぐ は ど を れ ぐ ど ぐ る て の 治 げ よ こ 乃

ちゝべいえんづゝきゝを　名うり是いろいろとゝをせ　まうこゝの
れ門の月活よ　をぐけて　雪みゝとゝん　ゆつゝゝれ　ゆよい
いまゝゝゝゝ　ゝゝゝゝ　ゝゝゝゝ　

心也　承安すでに　ならの縁あり

一ちいろこも　みちのくの国の産物の心ざしのあるべきとなり

紫上やうく　坂とすびめの心なり

一ちやうふぞうしすぐ　延喜式云　凡齋内親王除行幸院定

監送使一人　参議　或八中納言　元亮云　弁一人　史一人　六位以下官人一人

雨宴云　大臣　着陣定　前大中納言　各一人　参議二人　四位四

人　已上　勅使中納言　参議各一人　四位六人　長奉送使中納言

若参議　弁　史　中務　各一人　已上　養向下外記云云作式

云云　花　今案　群行の日　前に勅使　河原まで供奉

して　帰参　長奉送使　伊勢まで　すぐべきなり　上

洛の時　弓場殿　すくべし　下着の由を　養門

とれば　宮名　とれば　内職　事　作　事也　河　拾遺集乃

一ちどのへうなるめ

哥の詞を引　七十　老　致仕懸　其所　仕　車　孝経注　執政臣致仕例略　致

仕　いふ　七十　よりて　出仕　すまし　たれども　しるまちぬ

ら車　とも　先祖の廟　よこれとうる　度あり　故に懸車の

齢　ことに　地官　碎　いへども　孔政　度　あり　きこと

河海　よりとられる　ふる　坂　仕　ふる

一子校つれのう　千校　常則　生高名　操　兵　益　工也

一長恨哥　王昭君　楊貴妃　い馬嵬　ようる　れ　王昭君　い歳

狩　ようぐう　仍　いくく　治也

一ちうくすく　寺　左の　ようて　事也　柱琴　て　を

ちう琵琶をそうじ云

一中将のくるのけうれまづび

六月四日と荒手番六日と

まるの書云く花手結も左近乃

真手結也六月六日ゆあるれば夕雲中将左近ちかあ

とのこぐも引つれてあるんずる由ゆ結也手まづび馬

ゆこの時二人けうけて射る事歟

一ちうぐんよりもめべき いづかたもつめ心也二仏の中男也

一ちうすきうろ 遠うる也 一ちうき地鋪ハ唐廷より大政

高麗へうつけうる物也 一ちう 快賞 書物の快也

一ちやうれうつぐ有院の廂のたるぐのくるにいひけれる

人をるべし 一ちいとくうるうるなる 乳ち

くるめと云也りうぐうる心 一持仏 持仏堂いまぐそ

られぐれども 光仏供養の用意也 一ちやうしでめ丁子染番の墨

一ぐんのよりい 棚也ちんハ沈也 一ちうさまを 近衛大将

文

一ちうぐうこされて ちうけれもちうるこ云心也

一ちうほい 玉ぐうるよ系うるとちうほいきうるちうにまぐりる心

り

一りむじれまてあそび 何をそもちぐまちうるかの事とする

を除時ぐ云也 一りむじれ祭の頃ハ 賀茂乃

除時の祭十一月ゆあるる事也 南日ハ中の間也是を小祭

ど云也 頃ハ午日也 内裏をてあ是

一りちれうくへハ 律ハ秋をけうきぐる安も秋をつきぐ是

しぐろハ十月なれど冬ハ秋に属す

一柳花苑　上古ハあり舞也今ハ絶たり

一りんどうや〻　客とさやくごとむべし　六条院大臣なり

梅政の職を兼うけなれば　りんどうへていくるや　四月三日の

弓客人の乱まれりとゝ　杉菜うりさるべし

一龍頭鷁首　竜ハ水をこうるゆゑ　鷁ハ風を心ゆ仕するゆ故

しるしを作るゆ　一りちをばつぎれ地うゝ

あらちを次呂ハ黄律ハ秋也　日本ハ呂律　唐ハ律呂也

云律ハ陽也呂ハ陰也　然れ共　偽るゆゑハ呂律ゝ　いひて律を決ス

すゆ也　黄とまるれとゝ　源氏ら作心れ　調曲をも　偽るゆれ

ぬのゝ〻　呂律ゝ律ゝ次ゝ　法ゝすゆ　偽馬ゆゑ　呂律ゝ

付うゝ　本朝　伶倫のわ　ゆるゝ　呂律を陽陰ゝ　用ゆ云ゝ

一りんのゑ　ゆゑ弥義ゑ　ゆゑ引を　ゆんのゑゝ云也

ぬ

一ぬざすべし　ぬさすべ　うゝ　うゝ

一ぬのばく

一ぬさ　稜麻　撓て　道祖神ゝ　ゆゑ

一ぬもまれぬく　源のつぎ　ゆゑ　ゆれゝ　ぬすゝ　ゆて　ゝりぐ

さ　ゆゝハ行給也

うゝ云也

もゝ云心ゝ叶へ

う祈也

一ぬちの　沼　ゝ　ゝ

一ぬゝ　賊　貧家　ゝ

一ぬさけう　拾地の衣ぐ

一ぬさもあへ　玉ハ糸　ゝ

ちるざくらかな　ぬるさめぬまの　ぬれぎぬ

る

一ろうぎ　ぶんげんの童名　一ろい　親類や

一ろてん　三ぶいちう　流轉三界中恩愛不能斷弃恩入道為

を

一きつめ　いひをこさんとする心や　陷

一ねぶれごもりすがて　夜着專夜晝同輩　長根やぐそ

うつくしやせも　文衣のそのまゝおのやや

一をうをうれい　をうをうひうる心や　何　掘

一ねうめ　納　在後涼夜　依　ちまいうかとおさまる事

一をうすけまておりすう　助　及　成人の器

一ねうぐとい　島邊　なぎ

云や　愛石

一をうをうかどくしゝ　柳　立　日本記　俗ゝ　氣ぢうさる

一ねうもれ　れ腦　腦

ぢいうかの心や

一ねも　袍　衣や　ぢうの物　紙ぢうぐ　紙おぢと　ぢうぐ　いうち

一ねぶやけ　ね

一ねぶて　ぢうぢというる

をぢぶ　ぢうぢ云ぢうおぶ　ぢうぢてきといふ事

不ぢうて心うべ

一ねうます　愛の糸のひさ

清涼殿や　殿　殿ども云や　東庇　孫びさ　ぢうべ

一大義つゝ人　義人の子の大義つと云心や　二人そいぢる

一れでうてまちうて　元服　前ハ赤色の袍の腰ぬぢる

也。元服以後、腰まきして、黄なる袍を着うるなり。又淺
黄なども用ゆ。
一たちぐ〻こさげ　古大臣の源氏よ。麥の上の事をざれ
うたにはのあるなり。
一たちぐまいりあるべき　れ樽の盃酒、後ろ上して、引入の大臣い。
文まれ前まりて、れ盃を給りる也。
一大うちき　袴をはきぬのる也。是よ大小あり。男も束帯
並衣なども大袴いる也。大袴い男、小袴い女のさる也。
一たちひけまれこまれ　彩櫃、まげる常の彩の事也。
こまれ行そなる〻る彩るべし　西宮記云、未物、校物共
菓子也。彩をなして、落栢をなして、又菓を入て、お校、或も松
の人のちげる也云〻。
一たはぶくわんぐろの心也　一たはぶくの　大臣也
一たさく　淋と云心、或い頗、又い更ふと云心也。花優長ある更
也。面白らしさ云〻。　一たうちき　かちる何也
一たはとれず〻　油炭也　一たのがち〻何　各競　八雲抄云。
見れくある心也云〻　一たはぞう　大惣　ちるの心
一女のれいもよりんつ　つくもぐさい女のれいも、ちと休宿也。
雛つくまぐさはあるとわ〻〻ぐ云〻
一たひさ紙こもわる宝のうち　親の家よある程と云ふる。苗。
揚蒙有女　初長成、養在深宮人未識　長恨歌

一れはうれ　大やうなどうちうや　何穏
一ゆうてうてまつまつまつ　安流うと源氏とゆうたうしゆう
　うきゆ又我ゆゆゆてうたゆや　一たうう　十の畑七八とれ心や
一れはとう　はうれ日心や　一れはやけどうくくくくくくく
　五人　人　恨ちどうる事や　一をこうの風ゆゆ鳴呼ゆうれうと云
一れどうくくうう　おそうゆゆくき心や　鷺の心ともいうう
一れいくくう　おとゆうくき心や　風ゆとうやゆ云ゆうゆ
一れゆて　ゆを　面月とうゆうゆ紙云や　俗ゆはくくどくく云心
一れくくゆくく　敢遠　文選　とゆうゆ月うくくおそうき心や
一をうひひうれを　小鳥とうひうや
一れはいうこ　ゆせどや　一れいうすかりゆうれ何や

一をくくくくはどうるうるうるや心や　ゆうやうるうや
一をこめくて　鼻のうどくく心や　おくくきうはつうくと云
一れゆ一有　出産　俗ゆうはけゆうくと云
　心や　うくんゆうくくれはどうはどうくと云や
一れはれはどうくと日心や　一をくくくくて　はれをおくくうや
一をこうくくくうけうるや　一れはちのくく海　路や　れ路　大海
一をのれひうるれゆひうはけうゆ　魚と　いくんくくくの
　縁　うて　うくれゆうひうけうるくうう
一をうちうくく　遠近や　一をこくうう　痛のくくうるくと痛
　がくくうると云や　行くうくゆゆ考くあくくれ悩　悪をくくくうると云
一れくれうびうう　義ぎれと云　流ゆくる　手うくうう　声や

一れいぼうや　作也・ひつけよう紙也

一れいぼけ　矢心・紙よりはあるあること紙はけるさこゝろ也

一ちゝこゝろひへ　行ヘ也　一行くまゝうこゝろおくゝゝこゝろ也

万葉ニおゝくまへこゝろ　日本記

一れいこゝん　ワヽ筆ハ紫也・鏡と花の男こゝろへこゝろ・こゝん

こゝろこゝろ紫のこゝろ　こゝろ少濃こゝろこゝろ心こゝろ

一れいこゝ　紫のこゝろ　紫のこゝろ濃こゝろ　おこゝ　やうにあこゝ

これなこゝろこゝろ

一れいこゝ　これ愛也　一をこゝろひのこゝろ　行労也

一れいこゝ　ほこゝ　一れいこゝこゝろ紙あこゝこゝ

タヽ行の巻こゝこゝこゝ　こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

一れいこゝこゝこゝ　別こゝ人のあこゝこゝ

一大ひこゝこゝこゝ八の巻　何　大筆　策　詠　長一丈

分　故　異八分・律　書圖云・大筆　策　小筆　策・又云八

為短篇　玄宗皇帝　前　羅漢也・好　吹八　被　損出云

一れいこゝ　れ墓　秘色・今の茶碗也・秘色ハ磁器也・雖

別こゝ　こゝ翠青にて　こゝ晴こゝ・仍是ヒ秘色

こゝて・常ニ不用也・故号ニ秘色ト云・こゝつ色の花紙ヒ

こゝのつき・今巻ひこゝくいあ紙こ茶碗也

一れいこゝ　せこゝ　こゝのこゝこゝ

一れいこゝ　正月十四日ヒ日ヒ京中の僧ヒ月ヒ楽して

柏ヒ　こゝ方こゝこゝして・大家をめぐりこゝ人こゝ男　蹈哥こゝこゝれ也

まこゝ・ヒ代ハ絶てこゝ・今の世ヒ子　秋方巻こゝあり・蹈哥

を学びつゝ花鳥和音の巻々

一行ひとゝせと　上の句あしくゝめてんどつゝ寒さまさりを

とゝ云や

一行ほうとうとあるとゝ

ハ衣どゝゝゝさと云心なり

一れづくゝかくゝ三月　尼公九

月は幸玄殿方いとゝ月の服なるゝまして十一月晦日は除服也

一行ほしゝゝゝ事　桐壺

ゝゝふゝ也

源氏のれみゝ侍ゝ治まる也

一行びゝ中将のゝゝゝ

きろくのてがきれとまちがいは略儀ながら書て作り
一れほやけがくはるくそうしてぶすはて以中将貴盲うる
ようち宣下のくだりをうけ給るなり
一をらくそくたんりの心のはちわうこうれはせんらや
一れくがくる 臆病の心や 一れをぐ 源氏のとばといもん
と貴姫はようてれの字を入うるや
一大くるに 巻のすぐるに源や心をなくに心をうる心や
一れほ巻すぐる 常れ袍を指貫を着して 裾を引いはれつ
れの麦や出衣は 裾をうるにをけるれ出立ともいつべし わ
ざれうにふれうじいつもその心たがはるべし 場をみに主の字
や大人のするちぐ忘ちち又出衣すぐるを付場をうるすぐ

角といふ流あり
のおさるくちくまず時ちるとうぐくと故作や
一れくくう 男くちくや 一れやそのてぐち給れいつと
花 村上れ女 親子内親王天延三年に秋家を立て下向し給
れ母 微子女王 童明親王 女
れ息 ると 微子女王にちぐくへてより給ればられちる記に女子
あひそひて下向の例ちるにちるやかくはいるるべし
一をらあより 未通女子百 廿女 基記 乙女
一れくあるくそのくを 僧
一れくえくくハ八雲 おくあれ下女や ミクくひとそくくちる家
中に物代物ゆ下女や 不浄のるを生好の消二幅とめひわて

あの端を結合て、ひ丸をひらきよりけおもや、式女ひとまつ
云、曜や　一れはえ殿　故主海京の時、大和
路をへて、摂津より越て、難波をへて、七日に大江の儲所
に付給、十日に入京、給や、故に大江殿ハ、故実般家ハ旅館や
寄れ代一京毋文の旅所あるれバ蒸ものこいくるものや
一思賜のれ衣いい面こうん　去年今宵侍清涼　秋憶詩篇独
断腸　恩賜御衣今在斯　捧持毎日拝餘香　聖廟れ作
一れそハれ分をもれこず　れ門の源よれぞ変心者す
こうこうるれど、結ち結ーどこしこう
一れはい殿　大炊殿　新撰亦記　巨炊屋　旧記に多、大炊屋ど書や
一れめるづしひめて　業薩院のれ月るづしひ結ると、三条院を

れめるづしひめるるよりひるるへし
一れはぞれ星の光や　七夕祭よりの俗のる紙を上りもて、
星のひうをうれしてうるかるもと
一をのうこうつけうか　舞こや
一れ合れ　をるるるれる
一れ乱をのしえこ　晋手質石室山見数章ノ囲碁子質一物カ
棄核合之石氣局未終斧柯　柳冬既烂毎後時人
一れはこあそび　大れ種や　一れひそめ　松乱の巻よわさ
き根ごとあるあめ式ようみのへる
一れのそれこ　ひつそハ生正や、髪とそやとや
一れこねそひて　牛車　元中納言俊三位、位そひて八ホのす

九条内大臣ちゝ一位に成給へる也 従一位也 聽牛車也 寛弘八年八
月 左大臣菅原羽尼 案牛車入待賢門上東門 云々
一 おびたゞしきけちゑんなれども すぐれたる事 とのゐすぐるはねなるすぐ
のゝゝちゝも
也 一説大やうちゝ心ゑ
一 おびれゝ おさかびれゝ
各留半座 案華臺 待我 同行人 法眼禅門 舞
一 ちゝびけゝすまゝどう 弄 羅進 人の通付ぐゝゑ也
一 ちゝも おごゝゝ心ゑ まゝいゝもゝ
一 ゝゝゝ

経故薩罪如是 法花

子游問孝子曰今之孝者是謂能養至於犬馬皆能有養不敬何以別乎

一大原野の行幸　延長六年十二月廿日大原野行幸を模し

一花れ〳〵ちるさ　ほれ〳〵ちるさや

一花ばやけざ海ちてさう所

一のつき　花やちるべれけう氏　論語曰

花れて手ちる月心

女つくへる月私うちを立出さうけてそなさられる出仕のこの職ぢうにりいぶさうハ　ちるぐちるさうや　文されども人ぐ

まもうちぞさうち

こさ紅の袴ところ　俗はかうちる　落葉をや

一花ちぐう多　落葉をや

一れぐも此月ハ　三月ちるの　花ハ咲れ

一花ちる一の　蘭ハ省衣の心ちるもせうちる　夕も五も大家の孫ちや

一女ハうつまちるる　婦人有三従之義を専用之道　故　嫁　後

父既嫁　後夫死　後子　故　父者子の矢也　夫者妻矢也　孫れ養子ち

れども　又実父ある　引ちる　法身ちや

一をうちるつけて　嫗老女のうちちる

一花ちる　此月　寒通の事とうちちてうちうちうちバ

の川ちうみちるる　人の流ちるるハ　人の妻ちるるハ

おもぢうちれうちる

一花ちぐう　中道ハ　玉への道ちる

一花ちぐする　鳥ハ巣ち二度ち　拾ちや　玉を鴨ちる

仰の一不見ちたうう　一花ぐうう　思萌

一おなじくてぐす筆ハ下手ハ書事やおもくハらるゝ
ものさびなれど　さらハ上手ハ書たるゝれもの心ゝ
一おなじくれ　切灯臺うてうどくさ
一女のくるてゐんこうの記人も在　寛平遺誡よ　左大将時平
先年於女事有不快　一おなじいまうちごと　門府ハ若上
改大臣ゐれバ　おなじいまうちごと　門府ハ
ちぐみゐるとゐる　仰ゐれも日事とゐへ
一れそのつゐ十二ゐて　交冬のれゐゐ　花例ハ引ゐ略
一ゐゐゐ和のつゐゐゐ　河置物机　唐羅　朱濃霞
一れ伝ゐつゐゐて十八寺　十八寺ノ左位　清和天皇の例や
花島寺記ゐ妻
一女ハ妻とゐゐれゐゐゐ人の

女感陽氣春思男　男感陰氣秋思女　毛詩
一おなじくのゐをゐゐ国ゐすぐ　うつなのゐゐげるや
一をゐゐてひゐゐう行和ゐたゐてのゐゐ　人の心ゐう行ハ和ゐたゐてのゐゐ
一おゐゐてゆゐゐもゐれゐ　在　山哥ゐてゐをしゐゐゐ哥や　ゐゐ
ゐれ文字少ゐやゐてゐゐ
一女の分ゐれゐるゐつゐゐ　我も人もかゐゐつゐゐ
ゐれゐ女ゐゐや　女人為業障　涅槃経略
一おなじやのけゐゐもやゐれゐ　親の孝ゐ片ゐゐゐゐ
ゐゐゐ　ゐれゐゐ孝を作ゐゐ
一をゐゐ物ゐ孝ゐゐ　笛の琴　張物ゐゐ
一おなじやけのゐゐゐ　近衛大将や

一大くさい　一度我あひあひしるハ　そぐとくてハあさとさけ
世上ふるくさ也

一れいの行ぎ　竹しをの翁が
一れいしくあ　このこハ菓子ぞと
名所のくさぐさのあくた
あくた　入毒余湿藥　ぬ薪盡火滅　方便品

一大くさい　けくさくさすべくさけ　摘と罪ふかくあくた
一大ぐくい　鳥を幻ふくて　術をちくくハ　塗のり来と易てくちや
一小忌ふくて　青猪ナ一月中ハ　日新嘗會辰日豊明節會ハ
山あるくてすれくどくと云物ハ　ふくちくちくち

一をこちゝべし　昔の大皆ハ牝者高こゝひろきゆゑの心也

一をいろきうきあて　ちゝちゝとゝもゝぶひゝく書のべし

一をれぐこと　扨て生れゆひ　かゝとゝ古家いやゝて白髮

へハ接ぬべし　百ハ三十ゆけどゝのゞ者也ゆゑ中老ハさ

もゝゝゝとや　一れゝくゝゝをゝ　琵琶也琴

八絃の琴名也　一をゝとの絃　進食日本記

神功皇后紀北到二火前国松浦縣而進食於玉嶋里小河之

側仍止ゝ世俗ゝゝ　一ハいゝゝ紙納ゝゝ心也　一ハゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ

一ハすゝゝ　をゝゝゝゝゝ　一ハゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ

一ハゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ

女人流法不嘉禁不親厚況
復餘事乎

一れうれうせや

一ひちれどと紙をいらひてうられぬ

一をくと　紙納おくとぐるおちず

一をの地をろうるるやや

一をいれいまして　恋いと云心わるや

一をのく　已ぬや

一をやや

一ねどろび　生ぬや

一ねはい　大ぬ　已ぬや

一ねさろ川　奥中川又奥ぬ川

一ねまく　侍者　女を云或ぬ

一をどろび　まろるや

一をひれ　ぬられぬや

一ねいろく　紙納や

一れ　はんどろむ　れどろむ所

あろ文れどろむ所とろ百のくころてろむくされ

一ねはんべ　賛や　古今ゆべるる　大嘗会るや　ゆもまろる心

一ねひれ　老枯　縁角ゆの関案のくるとたれれどる

一ねはをろるけろや　一大ぬろ　大狂ろる心

一をろくろ　百ぬ及　一ねはろけるぐず　不ぬ弱

わ

一わろく　何　無別　日本記　無破

一わどくく　外変ぬ　一わどれ　ろろ底下や

一われれろ　紙そいあるるあるる負どる心や

一われれろさ　れる

一わざ　変や　一わぐん　伊弉諾　伊弉冊

のれ時、今作出給ひ云ふ。偖楽器の家と重宝やあつさ
琴、あつまごくもいつや。鴨も泥云和琴ハ元ハ弓六り
弦と引差て開けると後ハ琴ハ後ろ
一わろうあると哥ハ早下や　一わるいハやミ　疵病　疝ひ
世俗ハをとろといくるれると
一わんとると　王家ハ等倫王孫として姓と不賜平人や
一わ方へいるとろ　今下姫まいらる時休息する房ハや
一わるさ無い　幼者敗不蔵老者躰ハ温悲端ハ寒ハ氣
侍入ニ鼻中ニ辛ハあるとてのめくら
一われのれくなる　山陵式河海花鳥表賜て　御門菩
ハ入ハ指をとりて　神主の額ハ　ハ入ハ方ハと

ひとろ行ちく作ハあるとと云ふ
一わるくぶ陵ハろのべて　ハやけ入ハうまうず
て深ハ素食ハいれてハされや　悪魔居ハ人の伊人也あ
ハくとバ入ハとのハとと云やだのれ〳〵致仕の表ハあて隈
居のハとちぐ〳〵ハ父あるくとうれんまれ
ハしとばるハ心や　一わるぶ　ハるぶ海ハ海乃
契名や　一本ハハ
ちづむ心や　蛭ハのハ
一わるくハるハるハるハ心ハ海とハうめるさ
と云心をとあると　一われ〳〵ハるとうれ
ハとのハて別の指と指ハやれハき

つけて、社やうちうけ中ゝ志あつされ心や

一わうちうてうちうる　一ことゝハ、京へとゝむうさゆふちゝのゝ
しるゝや、うちて拍ハつゝぞうるゝ　ゝハ、ゝれ伺を伝ちうゝし
るうれどゝれ心や

一わゝハあゝを御のうゝしうゝい
ゝれのあうゝ　名あゝをれうゝゝハ御のうゝゝ紅梅うゝれのあ
うゝあゝうゝや

一わゝハ書文る事　書文ハうゝ
やゝ紫ゝあゝゝうゝ文や
代の時、菅家を左遷ゝうゝ　本朝ゝ民延喜聖

一わゝハけて　名童乳や、おうゝげうゝれ心

一王女れうて　王女れゝ、王孫をゝや、年崔院皇女昌子内親
王令泉院女れゝ世ゝ稱王女れゝゝ王女れゝゝゝゝゝ雄とも

音ハうゝひけや、女れちゝゝる　一わゝれゝいうゝのゝ　ゝゝわゝま
ひうゝゝゝ　有五家髓髓、又演成成ゝハ、年七病喜撰式ゝ
ハ出四病孫姉髓有八病是等や

一わゝうゝうゝわゝうて　うけわゝうゝうて、内蔵寮うゝ内侍
義人ハ、東階のゝゝるゝて拍むゝて、弁演竹舞童笙絃下略
南叶影ゝうれハ不詳うれハ六条院うゝのゝや、編ちゝゝる
うれ用ゝ吸ゝ、机ゝわゝうゝとゝて垂や、袋拍すゝゝて、一十
百千万ゝうゝて、袋ゝのゝて、ゝうゝのゝて紡暗ゝゝ弄ゝうゝのて

ゝうゝうゝ

一わゝうゝやうゝとゝてゝうゝ　皇慶童平調や

一わゝて又うゝうゝ　四月天気和且清緑槐陰合泄堤平　白氏文集

一ワ　ふるゆきに　ふるやふる心ふる　和の字や

一ワ　苔衣の　ふるゆきの　苔の衣こそ　ゆゆしの心や　苔衣　苔とハ大変のふる

一ワ　若と　ふれまいら給　袈の前日みの日や　新例多く　源氏のれ　袈を着

一ワ　菜　まして　病給や　十二行　若菜　七行　若菜　河海要

一ワ　紫さま　まこと　君ハ　源と　親　てこそ　絵　一本

れば　くるゆふ　ふれ　れ　みよ　くるとつれ　きれ　る心や

一ワ　ふれ　あつまれ　羹　一ワ　ケツキ　王気付や　手

一ワ　一　親世の　二　王　の心や

一ワ　ク　ゆ　れの　ゆや　我を知　る。　作　てゆ　ハ　ゆ　ら　れ　ま　で

ふ　ま　ん　や　ゆ　れ　ふ　袖ハ　拍　と　ゆ　れ　す　ふ　ぐ　し

一ワ　け　ゆ　ん　ふ　く　ん　ま　れ　袈　を　ふ　ふ　ま　て　ゆ　れ　ま　ね

と　ま　ん　や　ふ　ふ　と　菊の花

と　ま　て　ま　て　ま　の　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

撰　秋下　冊　出　ま　ま　ま　ま　ま

一ワ　心　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

一ワ　ま

行為業 河 無慚法師或懺悔

一われらて 身の中にあるべき教と可心得

一わるべ 無慚

一わるもの 虚偽 うそ

か

一文衣 四位 給女の恐名 門の内 ひのふ人 ちるようて 文衣 月卿

一かんぐちめ 公卿 たたたたたぐれ ゆよと云ちる

一かつて 寵 する心 寵

とゆと云卿

一かつてられば 可畏

の字 又冊

う神 日本紀 恐心 れ げ 天 れ 乳

一かつて いつ卿 ことハ 生 字 命 をいつる ことと

の心

文衣のことくをちるんとれんとれ

一わるべけるさ うれとつて月心 をられある

一かつて 頂

一かぐ うて けぐ 不 ちてちるべ れ 搖 ちをく

心 誑 ちる 事 ちる心

一かつみ 河 記念 極位 信 文集

一かうう 文衣のるこ 大る人 送 れど

文のるとて 紙 ちる月 せ ちる

一かんぐ 金叙

一かつる

乱情

一かんく　勘やうぐへ日.えんくとあわさとうくへぐとしべー

一かゝやくひのゝ　一条院の御時.東門院の御入内のとて.殿壺ゝまゝとくゝとゝとゝる.業兼拙作なる.当代のゆゝ出

ゝゝゝゝ拙作ゝ　一かゝのゝ待　伝ゝあれども.

作拙作ゝゝのゝゝゝゝ

一かいまく　坂石見　物ごとうるおれるようなるやう
一かいもの　具や　くと云有ようなるべし
一かどいとぐち　みのやうなる　今も門をあげなりする小家
のきばや
一かるかやとぐち　戸帳
中門のきぬべし
一かるかやとぐち　真帳とゐはらいでうるやうなるやうなるあしらひ
一かるかやとぐち　大工とうらぐれ　外ら云やしぶ外指
とうけのゆめんなる
一かべのうれこうもく　毛詩七月篇云八月在宇九月在戸十月蟋蟀入我
床下
一かべ　衝　老人　ゆうれよまのうれちう
一沖　九月に朔日なる間蓑の指ぐるや三十ケ日を
織るゆれ指ようなる案内叫ぶこうや
一かうをあくる　うちけうちるどいるるそれようして
とゐやくくあるけう紙うるけうちるどいるもるべし
一かうち　かゆいまこ云数の跳所の力や
一海　説もの伝　説もの素なれば居といえん勿論や　昔
大音王といふ王ゐうけうきあ紙指うけれを
国の王四人ゐうこれをうんすをのぞけう紙よこの
如ようをあうちの王うちるどうひもうるいのい
うあうして世七万八千九百星をもて世ようぐうい
あるその説ようこれをうして大海のうこをけうこと

とぶらひ文の主ちゝ[illegible]ひ給ひて
[illegible]吉祥天女の本縁より作り又安端
所龍王の八歳の女の無垢王の妻なれば后といとんで
わ遠ちゝ作り
昔ハ尼と云ハ髪をはやしでゝ
一かほいあくすちゝて　ちゝさのあくゆゝ
一かんぞ　おさゝ紀時はうんざ　みとねどうこあけ
ちゝこぞうけちゝうぞちゝとゝ
一やうちゝ人のちゝ　大徳のかれちゝ
ちゝさい世の業も心いとき尼ゆゝ
一かのちゝ人ぞ　前よ尼ゆゝ源氏のゆゝをゆゝ

のちゝと源氏のゆゝ[illegible]
一かのちゝを　源の小柴ちゝて　ゆゝ尼ゆゝ
ちゝゆゝ　尼ゆゝのちゝ[illegible]
一かの色ぬひる[illegible]　紫の代女のゆゝ
一かうやう　やうと云心や
ちゝゆゝ　ゆゝ[illegible]
一十月　うゝゆゝちゝ
ちゝ退おの時　ちゝ[illegible]
第代ゆゝ結元
くといちゝちゝ　ねつゝ
ちゝ[illegible]
一かゝ人の数
一かずゝ人　源氏のゆゝ人の数
一かうゝ　ゆゝ[illegible]
一かゝ[illegible]　[illegible]
一かゝねつゝ　ちゝ[illegible]
ちゝ[illegible]

八講ちどの論議の時、講者、ねどいへど、威儀師、磬を
打すゝむ。そ後は論議をやむるなり。そ心をもあずかるし
一かゝらまひゝゝ　ちゝゝゝうきもそゝ結ぶるや
一かゝとのうまどゝも　うち場や、さゝちど回るや、しもと体
ぞや

一かゝるゝ　ゆゝ　ゆさゝ乳人のゝ　一かゝるて　人ゝるゝ乳や
一迦陵頻伽　聖王天中天、伽陵頻伽、聲、法華經、伽陵頻
伽在声勝、鷲鳥、ゝ或迦樓賓、或云、伽陵頻、者梵語や、伽
陵いゝこの中ちどもよめでりづき

一神ちどもよめでりづき
大徒云、いゝゝう作ゝゝといや、やて同者死鼓の大井乃り
拳よ、冨小路のれ息所のれ腹の親王の七歳ゝて、舞まて

させゝゝゝ

一かきあつまりをどり　調子とまりくるうまを入る

一かもじ　蝙蝠をうて扇を作初けるや　常の扇や　仍て扇

の異名や　拾扇　うあくまで

一がくまつりあるとうん　定家卿つやはいくまつり　親行なり

又　表ちがいひうんうる　表紙行も　御年や　鄭列のあのうる

上代　采天の字しるとうや　又　文書　草文書　白頭吟と云

平とけうてあれば　月　る　相如これとして　義とこけうる

一かうれちうれとうすき心とけ　深き心とや

一かくちといさうにをいそず　花　鶴高　いれ　地ぢうて　舞

糸ちう　伶天　暦三年三月十一日　二条院　雲寓　陽成院　月

十二月　円義　行尋　義雲寓　各有舞　糸昂　養春　寓　嘱　又

地下　伶人　ぢうて　表上の舞　ちうや　地紙のちうの面

軽もあれも　あるとあるとうちうちうや

一かうじもえうやら　侍所　秀逸　ちうと　毎月　感

じてうやず　鎌倉の　ちうとうくるれ

一かうまべさやぐち　ねづれ　ちうと　余梅　ちや

一かぐうくうちあるをうちうハ下仕　までもうちうちうぐ

八上蔵のうちうや　汗　被衣上　る　ちうちあるとうち

一かうけ　豪家や　うんもんがちうとふや

一かうのぐいぢうん　表ぢのうちうけすぐれする事

表　この字　沙上の雑袋や　法師　ちうも　ちうず　ちうとれと

いぢうとうい　一貞　名ばちうや　近衛の　将曹　庶生と

一人つゝうちゝゝ四つゝてつゝ人をいゝも職る
ゝて隠身とゝ面つゝハゝぐゝちあゝて世のゝびゝゝゝ
るゝゝゝ

あり。幅の広さて中に庭をなすあるや

一かけまくもうしこれ申すまくよりて　宣命の初　掛畏

一かもれつるきさいはそんつるれみ給ひい　孫王そもうごらんべし

孫王為秋院　例真子内親王　文徳孫王中務　仁和五年　孫王

例此一度ノ仏事　秋はとかゆるこい昔はばゆる心やおさ

一かけまくも　秋はとかゆるこい昔はばゆる心やおさ

ひしるるあれば　一かくしも　辞退や

一かろうぜ　軽哢　朝哢せるらや

一かるのまれといれ　天稚彦門之湯津槻樹　旧史本記

一かるの　の楚屈原　ゆるれしるをいるれ　仍屈原

こうべうず

一かるのれ　の縁直衣

絶とうるとと絶絶とうあこ侯や　紙は光も平絵の生衣や

白襲のうるもうすき絶や

一かんの去人ふるる　畳　地ゆるも　出仕せるるを

一かるれとるる　鳳楷ごえて　庭れ声とうるすると

うれ者も日

地や　或海地ごえる　畳　見ごうべ　純角の寄松ようるれ

うるをいあうごえ

風越島原南牧　馬ハりと　胡馬嘶小

うるしていうや

散ハ琴の秘曲うる　嵯康の華陽の言うて　仙人あのてつ

世や　仙人ハ貴人冷泉の多仏や　一かるれゆれ行大納言　織貞令

云。大納言二人云。今の文のくちぶり二人のかいうどもう
かるれば検の字をくわへべき也。寛平遠帰の心也。二人乃うち
に検官あるべき也。うるまれる官のかとばいうまも検乃字
をくわへべきにて。源氏も検大納言どいうれの也。守氏ハ四下
人検十人くわへ一かくる波をつけて遠の人ども也
一かくる人十づゝ　十列とハ東遊の舞人十人なる舞をおもて
にさし地をきて。弾正台の雲客春日侍など
右奥して。社頭にて来ゆきもしく舞をして。馬場にて馬を
もよおすなり。右近の官人共をいらむ。八幡臨時
祭ちどきハ舞よれ雲客舞人ども。源氏の右近将監
も。六人十列を奥しめるちうべし

一かりうれ地をうばれ出いせまうびて　長徳二年八月九日。仲
堂殿　干時　辞右大将　同日。童六人為随身。三年十月九
日。勅賜たむを清府生各丁人を清各三人為清方。佐侍童
みを云。今案ハ清方ハ清方をうめて。ひをうれすべ。氏をめひ
すうをいみうれど。それ装束の多百見ち。水干をうべし
やうをうべしや。清方じうへどうやをうをうべうを
やいづれもうをうる。沈授をこ侍をうれ堂殿ハ六人どこうわ
れをハ十人どあり　文融云。童侍方侍をう。国史をうもう
ぶうを。うれどもめひをう侍をうれをもうべし。此物侍をう書ハ所
沈授をうべし　一猟れ鈍
蘇姑射刀自。蘇姑射山。いづれも古物紙也

一かさつんとる〳〵とりつんだ方ゐまも此時分明石は寒の冬也

一めんやがらにりしたる紙でいして弾じいして強うも紙屋の人

知て色紙すきをせとてもやうれさハ唐綺やとれうす物也

一かうゑいぐらうて　紙とつゞてかゝれぬのやうゑ

ゐ〳〵けうゞゝてもゝ　青ハ絵よゑ物をしやゝ上の付よ中綴云

もゝ四とゝ〳〵ず此此せゝはゝぶおもゝろき紙ゑとゝうのゝざあ

れいゝゝゑいゝゝゝ後の内ゑとゝゑゐ指遣第九付云　慈義云紙色

一あゝと馬ひけう而ゝゝ

一かうゝゝゝ四疊ゐゝ

一かうゝゝゝ

陸奥風力蓋寡風の力ハ内大臣殿心中ハ貶されハ不成とも
今ハ為とても源氏のちゝつゝゝと云心なるべし　ゆくさうん
る不可成とも
一風の吉凶行る風生行和窓
間明月迎和時臺上行朗
一かけていへばうけていへばいひ
れいや　籠のゝづゝ紙ハうけたるとうけたるを
まして弟や　袖をとけしもいふる意しゝと紙ようる
一かいつゝちゝとゝゝるゝゝて　河　搔練いとのうすき多也　ゝゝゝ
のまゝゝゝ着てと云べき紙略しゝゝ為搔練いうすき紙乃
きゝのねゝちゝゝと云　お中びゝゝとハふ袖を云ゝや　絡ゝど
きていうゝて　落ゝゝゝとゝ着ゝゝべし
一かゝゝゝ　賽
一かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ　唐東京錦　日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
鳥羽と東京錦と云へゝゝ
きハ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝちどゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人のうち是を着ゝ　かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一風ゝけい波の吉さ人　晴嶺日記云石山ゝゝて　ゝゝゝ
山吹の滝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
近江の名所ゝゝ
一かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

不敢殷童男童女舟中ニ充文集

一かつてうこつよ　喜春ふ呂や及音い呂ようり律ようつを云や

喜喜ふい黄鐘調のふや平調ようつて用うつや仁嘉俊黄

鐘調も律や呼うくうこ忌律の呂うつるや呂律次第

一かつうこつ　ものくうこ　どうこうなるわめ神や

一かくーやく　大月どうこつや　一風の吉秋ようつるわと　秋風ふ

のいや平調九次ノ利盤涉とうこ

一かつどうこうこ　うじ猫い親のなようま紀うて涉更盤ようつ蓬也古今

よりよい猫どうこうれうつ　一かうこ紀いそ涉もあて寄ようる　日

本紀ノ一云天照大神踏堅庭而陷殿若涉宮ハ壁散　今案

うこ紀若い寄とうこうべうこうや　そうれうこうれ悪行を天照大神

のつうつるつるは　まうすふのつざそ涉れいそ涉れる忌今

ちいふと弁ふ將　どうこいるれうとちうこうこうこ

一かけうこうこ　急や　一かんの忌　関將督ようつ涉う

一かつ　家よ初て寄ふ寄のうよ吸べし　一かうこや　雑淺や忌結心

一かつうこうこ　九月どい世塔よ猫うこ元十月こ用まいう

どうこめうれうれいい九月ざうつよ命をうつうとうこう

一かの涉いうこうこうつるつる紙　家和よ嫁合ふ男必ふ川を引こる

と云う涉ふとかうとけうこ元くこいうねぶい密通の面や

一かうこのやううて　笑を云歌也　一かつうれのの　略ふかもとうつを也

水芭蕉相通や　一かうこう　蓬楽夜の莖也　芭い梅

一かつうこうこ　月ふ露　月ふ露

紀秋い菊伯後冬い玄岩

へぐてどい島もあるんと改べし　ここ弟を感じていくち
一かんなのこ　假名を本何時始起て何人百姓長寛往古和河
八方楽日本記の年代物也　一かうさくなるる物也　遠遠けさく恩
一かうさくても　茶の名いあるひとを云　物猛ハ夕当れもく文章生
そあるーといくち　院猛一枝巣山所玉今ハ課試及第
麦飯茶　茶風ろうの茶の風や　博士よろくるる也
一神武月九日あるまつれ　ごに六条院に行幸　康保二年
十月廿三日　村上天皇行幸　茶雀院に行幸
一かえ　舞　有飯　茶雀院よろ　漢武帝　柏梁飯よるくどる
ろや　東ふれ　茶也　一かうーのぐい　つくり茶さて
茶ろ　茶也　一かうさくち　時　江さくくち

一笑皇恩　河　延喜六年月十六年に笑が　笑皇恩万歳
ろ　此記ろくくくくく　一かうさくまれどろ　ふぐ物ゲと云也
一かちり　歩り也　中将廿将　どねちどもよねくする也
一かけ物ども　勝負のけ物也　一かぎ石清水除目の茶　摂政関
白　社茶の時のろ也　一かうさくぬくて　くぬくて云
茶の名やくふ名ろくくくと云　一かんぐくく　神宝也
一かくくくくくくくる　茶の茶一口ろ　引て　茶ますれ
一かるひるくまれもろくびよろう　琴れ　宝ろ　宝ろあづち世
ろあくくくぐれ　琴　一かーこまちろ　演慈ろ　綱
とな知行ーと云也　一かーつまこ　茶ちれ神とハ茶
幾れすとろり　柏ま　茶ちれ神ときろくくくくくくく

一かんこんのこうもの　唐織物のかぶせ
一かうもの　ものかい　絹流　一かんこうち　吉日なり
一かすがの　合歓とて春日もの　伊勢おりまし　春日なり　君臣の
御ゆか　中宮ゆかの　中宮ゆかの　秋好の中宮　紫式部　宵をあひしるしとも
一かうぶえ　うえ　笛
一かうこうい　踏舞　高砂　幼者　一めさあうきて　物と　早こいあるす
こうこうこうこいあるく　神
一めつれげよりづつこいあるずや
為人が　将院　そい　別　こ
とこしこと　ひげ　ゆの　姫　の　鬢中　こ　こ　ゆへ
一めんあるあう　こうん　ものこうれあるず　ゆ　このもと　物
一かんすいこ　酔　酔　ゆい　出　ゆ　舟　ゆ　其　別　あこう　ゆ　物　ゆ

記應和元年四月三日夜、宴舟、ゆ養、酣醉、ゆ、舞人四人云々
又河水ゆと云流々
一かぐ　物　こ　物　こ　作も。
こうへのこあこあこ　ゆの　沢　ゆ　めひ　ひ　ゆ　ひ　ゆ　こ
一かせうとて　風心　うと　の心や
一かぐ　去　ゆ　ゆ　ゆ

一かの島　姉妹の仏ろうかとくいもんくあるやうく仏ろう泉とや　産

ときいあつて拙云変ぶれ心ぬ　一あるまや　一かうぎんなく　庚申

一かるくこうちるぎぐんん　中者も拙ぶひ　ひうさ舟もやちりがくんと

やくくこいるぐいや　一かるくおとりれ　おとり波のるも

世のるくひとや　一かけうろ　れやきくろ嘲

一かのうぐーこうぐ　若き人ぼ　是業旦弁　おるるれ　紙隠表優若

者是人　現生口中　常生　蓮花秀　光明孔中　出牛乳　梅檀香

法華経

一がまれさう　降魔相　不動尊

念怒のねとあくくるる心りや　一かくく舟　うさ舟

くくう　鶴や　寝りて　鶯と

一かくくく　天雲　頭雲　何りて

一かくとぬ紀なりりいくー　出雲寺

垣ぞこうせくろ　髪ぬ

一かくくひ　法ーれ　火

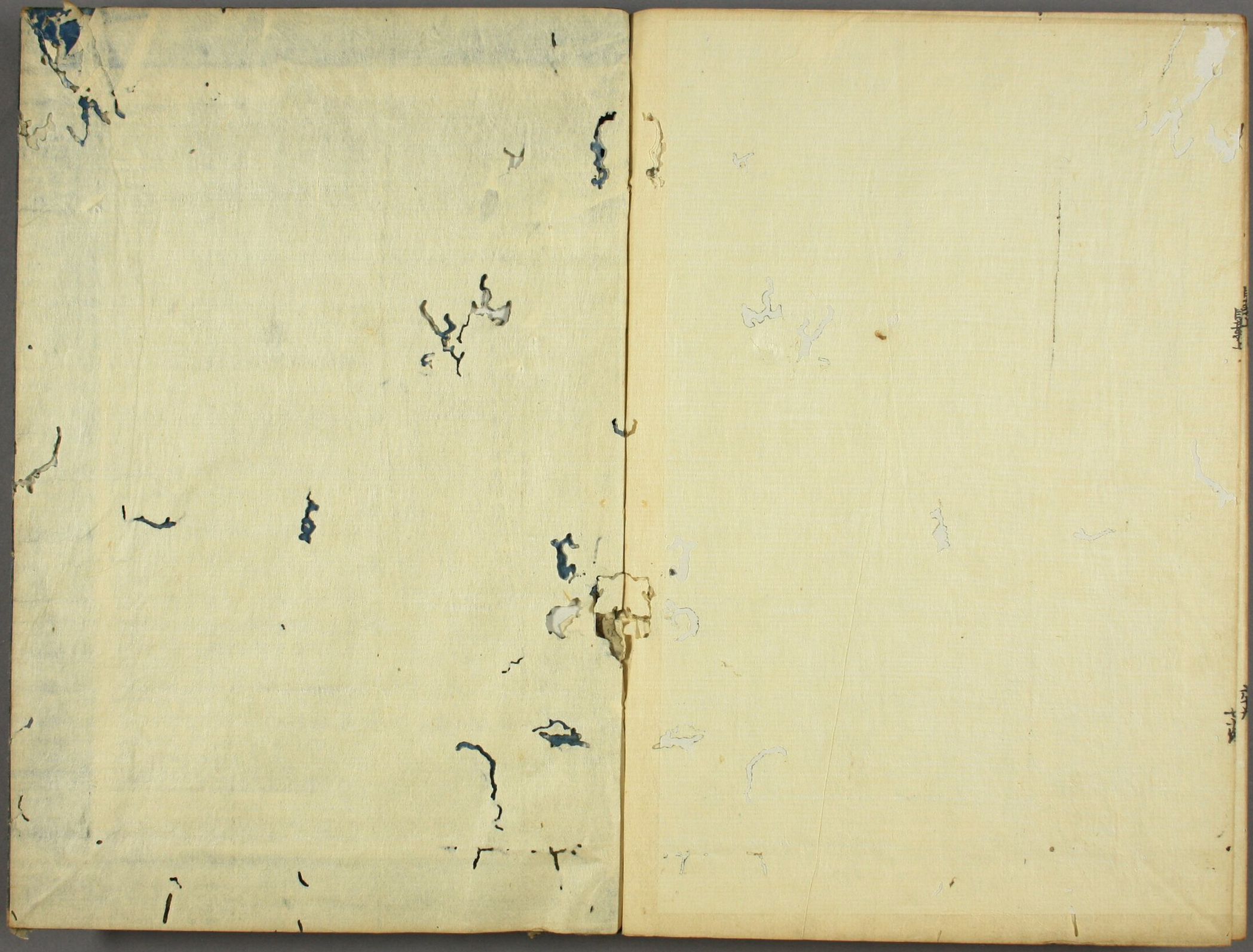
めぬくくり　慢の毛　あくくばれば　立くくもおとりめりぬくんと

一神ぬど　神分る心　経ーむ　むるるべー

一かぐくそと　一生男　一風のまぐれ　地獄のかのなな

風のまぐれとぬく　一れも　不離や

一かくくう　学生や　一かうど　大やけれ　勤尚

一かせこうげふ　思ほまりきあげけべよ　文選宋玉風賦曰

麗石伐木　梢殺林莽